



災害時のトイレを考える

新宿区が備蓄している災害用トイレの組み立て体験、車椅子によるトイレの利用体験、流さないトイレ実験を踏まえ、誰もが安心して使える避難所のトイレのあり方やルールについて話し合いました。

話し合われた意見や感想

- ・災害用トイレ（ベンチャー）のバーがしっかりと固定されていないので体重を支えるには不安がある。
- ・内側から扉を閉められないため、補助する人が外から見守る必要がある。
- ・屋外のトイレにいく場合、車椅子の方や高齢者は、段差や細い通路などが心配。
- ・トイレ機材は重いため、組立中は協力して支えてないと危ない。
- ・在宅避難のための備えは各自で必要となるが、トイレ対策は身近なものを使ってできることがわかり参考になった。



災害用トイレ組み立て体験



災害用トイレ車椅子体験



流さないトイレ実験

コラム

新宿区が備蓄する災害用トイレ

新宿区が各避難所に備蓄している災害用トイレには3種類あります。マンホールトイレ（写真の①と②）と簡易トイレ（写真の③）があります。組み立てにはみなさんの協力が必要になりますので、防災訓練などでぜひ、組み立てを体験してみてください。



①仮設トイレ（ベンチャー）

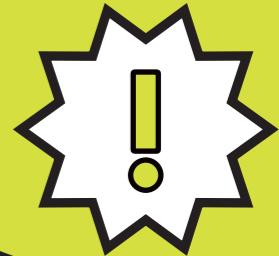


②仮設トイレ（イーストアイ）



③テント+簡易トイレ（セニター）

令和元年度「新宿区女性をはじめ配慮を要する方の視点でのワークショップ」レポート



みんなで考えよう 多様な視点で取り組む “避難所運営”



新宿区は、女性、子ども、高齢者、障害者などの多様な視点を反映した避難所運営について考える取り組みを進めています。令和元年度は、柏木地区及び角筈地区で実践しました。

令和元年度は3つの体験を通して、多様な視点の中でも、特に車椅子や杖などを日常生活で利用されている方の視点から、災害時の避難所の運営について話し合いました。

このリーフレットは、その時の“気づき”をまとめたものです。

新宿区

みんなで考えよう 多様な視点で取り組む避難所運営

なぜ多様な視点で避難所運営を考えるのか？

本ワークショップは、多様な視点として女性の視点をはじめ、障害者、高齢者などの視点を大事にしています。

過去の震災時の避難所生活では、女性特有の困難や障害者、高齢者などの生活上の苦労があったと言われています。またその支援者により、要配慮者への支援の質を向上させるための工夫がありました。これらの困難や工夫などは、実際に要配慮者の視点を持って避難所での生活を体験してみないとわからないことが多いのです。また、誰しもが“自分ごと”に成りうることもあります。

そのため、本ワークショップでは、“体験”を通じて、災害時の避難所運営についてみんなで「考える」ことに取り組んでいます。

過去に学ぶ

東日本大震災、熊本地震の避難所運営の経験者に、災害時の避難所運営の実態、避難所と地域との連携、日頃からの防災リーダーの育成などについてお話を伺いました。



菅野澄枝さん

仙台市地域防災リーダー（SBL）、岩切の女性たちによる防災宣言を作る会お世話役



満田結子さん

自然派中華レストラン「藍・天」（熊本県益城町）、元益城町広安西小学校PTA

菅野さんは、東日本大震災前に「岩切の女性たちによる防災宣言」をつくりました。その翌年に東日本大震災が起き、菅野さんは宣言を作った仲間と避難所で活動を始めましたが、防災に関する専門的な知識と判断力がなかったことを痛感しました。そこで、女性防災リーダー養成講座を受講し、現在では仙台市地域防災リーダー（SBL）で、自主防災組織と協力し、自主防災活動の推進・指示や避難所での指導を行っています。

満田さんは、熊本地震では避難所には行かずに、在宅避難生活を送りながら、子どもが通っていた小学校のPTA仲間らと共に、避難所の炊き出しの手伝いなどを行いました。停電で冷蔵庫が使えなくなったため、生鮮食品から順に炊き出しに活用したそうです。自宅前で近隣の被災者に小さな炊き出しを行いました。熊本弁で「できるし できたし できる人が無理をしないでできることをすればよい」というメッセージをいただきました。

お二人の話をうけ、視覚障害を持つ方から「視覚障害者は災害時に情報がなく、土壇場になった時には迷惑をかけるんじゃないかなと思っている。実際はどういう風にしたらいいのかわからない」という質問をいただきました。菅野さんからは、「私たちは、配慮が必要な方に対して十分なことができませんでした。そういう方々がどこに住み、どういったものが必要かがわからなかったのです。ぜひ教えていただき、マニュアルと一緒に作って欲しい」という、“共に学ぼう”というメッセージをいただきました。



避難所を考える

身体障害者、女性・子どもの視点による避難所見学と避難所運営ゲーム（HUG）を通じて、避難所でのトイレ利用などの際の身体障害者の方の困難な点や支援者として必要なことを考えました。

避難所見学

【参加者の感想】

- 施設内に小さな段差やスロープが多く、つまづきやすい。
- 学校は教材や展示物が多く、視覚に障害がある人にとっては、生活しづらいのではないか。
- 車イスで利用できるトイレがあるのは安心だが、数が少ない。
- 多目的トイレが停電時でも手動でくことを確認できたので安心した。
- 障害者向けの部屋と多目的トイレに距離がある。
- 障害者向けに想定している部屋が1階にあり、移動は楽だが、床敷きのため、長期の生活は難しそうだ。
- 家族に車椅子利用者がいるが、見学をしてみて避難所での生活は難しいと実感した。
- トイレも洗面台も子ども向けなため低く、高齢者や障害がある方には使いづらい。



校舎内のトイレの見学



マンホールトイレの見学

避難所運営ゲーム（HUG）

【参加者の感想】

- 受付を体育館がある2階にすると、足が悪かったり、杖をついている方は行きづらいため、受付は1階のほうがいいのではないか。
- 高齢者と一緒に避難してきた家庭が多い場合は、高齢者で固めずにつながり、みんなで一緒になって助け合ったほうがいいのではないか。
- 高齢者や障害のある方の部屋はトイレに近いほうが良い。
- 盲導犬は、周りの避難者に配慮して部屋を分けたり、仕切りを設けたりしたほうが良い。
- 身体的、心理的に不利な方への配慮が必要なことを改めて知った。
- 着替えや授乳のための女性用の部屋のことを想えていなかった（男性）。



HUGの様子

避難所運営ゲーム（HUG）とは

Hinanzyo Unei Gameの頭文字をとり、通称HUG（ハグ）と呼ばれています。名刺ほどの大きさのカードを避難者に見立て、避難所の図面に避難者を配置していくカードゲームです。避難所運営をみんなで考えるために静岡県が開発したものです。